

奈良教育大学における学校飼育動物に関する講義

(2020 年度は実施せず)

三 本 隆 行

講義科目 「生物学」 枠内

講義時間 1 時間 30 分

講 師 自然環境教育センター
三本 隆行

対象学生 教育学部所属 1 回生

講義内容

1 生活科学学習指導要領 目標(7)の紹介

「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようになる」

2 心に残る生活科の活動(日本生活科・総合的学習教育学会調査)

- 1 位 飼育栽培 2 位 学校探検
3 位 公園や野原での遊び
4 位 収穫祭 5 位 昔遊び

3 AAI(動物介在介入)について

AAT(動物介在療法) AAE(動物介在教育) AAA(動物介在活動) 各々の方法と効果

4 動物が子どもに与える影響

動物が存在するだけではなく、飼育(世話)に関わらせる事で良い影響を与える

5 DEATH EDUCATION の長所短所

6 学校園での動物介在教育

- ・感性を開く入り口
- ・生き物への興味

7 愛着のある飼育活動の継続

- ・愛情を教える
- ・動物に懐かれて自尊感情を得る
- ・世話する楽しさを教える→(動物の)親になる
- ・生命維持の作業の実際と大事さを教える
- ・人との協力・関わりを教える ・生物への常識と科学的興味を培う

8 良い飼育の継続による結果

- ・生命の大切さを学び、生命尊重の立場を養う
- ・動物愛護の心、動物に対する興味を持つ
- ・責任感を身につける
- ・科学的な見方や考え方を培う
- ・人を思いやる気持ちを持つ
- ・緊張感を緩める(癒し)
- ・生きる力をつける(ハプニングに対する反応や工夫)

9 体験の成果を得る為のポイント

- ・担当の先生だけではなく全体で支える生き物への配慮が子どもへの配慮に繋がる
- ・簡単な世話でたっぷりのふれあいを行う
動物への愛着を培う
- ・専門家の支援体制
近くに相談相手がいる(獣医師等)
- ・保護者を「子育てのために」巻き込む
(教育活動への参加)
保護者の理解を得て、楽しみを共有させる

10 評価点

楽しく幸せに動物と接しているか

11 飼育介在教育の問題点

- ・アレルギー
- ・教員の言葉や指導方法
- ・飼育方法 ・休日の世話
- ・動物のケガや病気 ・衛生面

12 講師実践例

不登校傾向を示す児童へのモルモット飼育による支援の一考察

(会誌「動物飼育と教育」2015 第19号)

13 ウサギ、モルモットとの触れ合い

14 課題 学生レポート

「私の生命教育」

講義時間は90分間なので、かなり駆け足の授業になってしまいます。

理科教育コースに所属する学生が全体の8割を占めるので生き物に対する興味を強く持ち、特にウサギやモルモットが講義室にいる事で講師との対話も多くなります。

ただ、過去にウサギやモルモットに触れた経験が無いまたは少ないので、「自由に触ったり抱いたりしてもいいよ。」と言っても、なかなか上手に触れ合えなかったりする学生が多いです。「ここをこうしてあげれば気持ち良さそうにしているでしょ。」と実際に撫でたり触れたりする場所を教えると、小学生と同様、嬉しそうに抱きかかえています。

講義の中で「動物であれ他の教材であれ、いかに上手に導入して児童たちに活用させるか、個々の教員の能力や関心が大きく関わっている。動物をただ飼育しているだけでは興味のある児童にしか映らない。」と話すのですが、これは将来教員になる学生だけではなく、現役の教員の方々にもあてはまる事だと思います。

以下、受講学生が書いたレポートを紹介します。

【「私の生命教育」教育発達基礎コース 幼年教育1回生】

小学校では飼育動物がどちらかという必要だと思う。動物を飼育する事で、命の大切さ、生物を飼う事の大変さを子ども達が実感できる。

しかし、飼育の仕方や教師のサポートが適切でないと、動物飼育が逆効果になってしまう。

私は幼稚園へスクールサポートに行っている。そこでもうさぎを飼育していた。しかし、飼育舎の清掃は1ヶ月に1回、掃除をする頃には糞が山積みになっていた。園児達も「くさい。汚い。」と言ってほとんど飼育舎には近寄らない。水や餌も与えられていたものの、水はいつ入れたのかわ

からない位黄ばんでおり、ニンジンは干からびていた。そんな状況でも一向に飼育状況は改善されず、結局うさぎは亡くなってしまった。講義で先生が話した様に正しい飼育や愛着があればうさぎも死ぬ事は無かつただろう。更にもっと衝撃的だった事は、うさぎが死んでも園児達に何も反応が無かつた事である。「お墓を作ろう。」「埋めてあげよう。」と言う園児は1人もいなかった。もっと大切に飼育していれば、園児だけでなく教員も死を悲しみ、命の重みについて学べたのではないだろうか。正しい飼育と適切な指導が無ければ、逆に生命を軽視する事になりかねない。教員が子ども達に正しい飼育について指導すれば生命の大切さを学べるが、それができないのなら学校園で動物を飼育してはいけないと思う。

そこで私は生活科の授業の中で飼育動物を上手に活用しようと思う。

まず、動物（うさぎやモルモット）に名前を付ける事から始める。児童達が名前を付ける事で愛着がわき、興味を持つ。

最初の1週間は教員が飼育してお手本を児童に見せる。この時、教師が動物を丁寧に世話する事で「動物は大切に世話をしなければいけないのだ。」という事を児童に理解してもらう。

その内、「餌をあげてみたい。」「仲良くなりたい。」と言う児童が出てきた時に当番を決めて世話をさせる。飼育する事の面白さと同時に、大変さもわかってくれると思う。

また、実際には難しいかも知れないが、大事に飼育していた動物が死んでしまった時こそ、子ども達にとって命の重みを学ぶ良い機会になると期待する。もしかしたら、大切にしていた生き物の死に直面する事は初めての経験になるかも知れないので、深い悲しみの中で死を受け入れ、生きる事の大切さを学んで欲しい。

(帝塚山大学)